運動会と運動場

運動会・体育祭シーズンである。私にとっては、苦い思い出の方が多かった。でも、人工呼吸器ユーザーの林京香さんが通う、名古屋市立堀田小学校の運動会を何回か見学した。京香さんが「赤組応援団長」で活躍したときには、私もつい「赤組がんばれ」とささやいた。

話は急に変わるが、日本経済新聞社編『限界都市 あなたの街が蝕まれる』のなかに、東京のタワーマンション乱立と小学校のことが書かれている。生徒が急増し、しわ寄せが運動場にきているという。関心のあるテーマなので、抜粋して紹介したい。

江東区の中でも特にタワーマンションが集中する豊洲エリア。区の担当者は「急激に子どもが増え、これまでは運動場で全学年が一度にできていたことも今は学年を分けてするようにしている」と話す。

2015 年度開校の豊洲西小学校（江東区）は新設校にもかかわらず、児童 613 人に対し運動場は 2381 平方メートルと基準の 4 割弱しかない。「休み時間に全生徒が遊ぶと危険。遊ぶ内容で場所を分けている」と副校長。児童同士が衝突しないように、ボールで遊ぶエリアや一輪車で遊ぶエリアなどに分け、曜日ごとに体育館を使う学年を指定しているという。

運動会でも保護者の応援席を運動場に設置できず、「基本的に校舎のベランダから見てもらう」（副校長）。全体の 3 分の 1 にあたる約 200 人が 1 年で増えるペース。学区内でさらにタワーマンションの建設計画があり、今後は校舎の増築も必要だ。副校長は「これまでの 1 年間で浸透させてきた学校のルールなどもまた新たに定着させなければならない」と生徒指導上の難しさも漏らす。

浅間堅川小（江東区）は豊洲エリアからは離れるものの、ここ 10 年ほど学区内で大型のマンションの建設が相次いだ。児童数は 10 年前の 2.6 倍の 1000 人となり、休み時間は運動場、体育館、屋上を学年ごとに使い分けている（写真）。実は浅間堅川小は 2000 年、児童数の減少に伴い 2 校を統廃合して開校した。その当時は大型マンション建設の計画はなかったのだという。いまや運動会も全校一度には開催できず「学年ごとに 2 部制で実施している」（同校）

（2019 年 9 月 29 日）